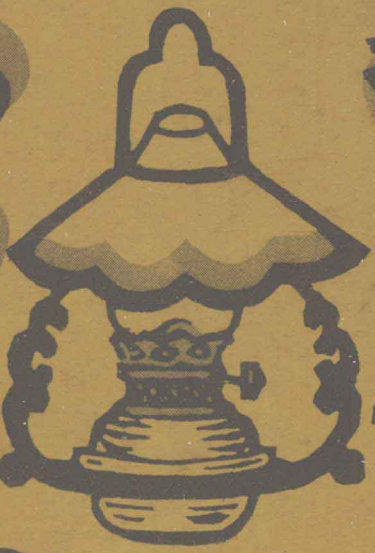
Lamp

らんぷ

ランプ



Lamp

ランプ

川上澄生

限定一千部

昭和二十八年八月二十日　印　刷
昭和二十八年九月三十日　発　行

定価三百五十円

著　者　川上澄生

刊行者　澤田伊四郎
熱海市水口區牡丹臺

オフセット印刷所　錦明印刷株式会社
東京都千代田區神田錦町三ノ二二

発行所　龍星閣
熱海市水口區牡丹臺

製本・牧製本株式会社　函・中田製函所

A

文明開化は黒船に乗つてやつて來た。御維新になると文明開化は大びらでやつて來た。岡蒸汽は車窓の外の風景を眼が廻るやうに走らせた。それにも増して針金便りは早い。櫓時斗や尺時圭は舶來の袂時計となつて人々の懐の中におさまつた。「只今は何字時ですか。」「西洋第九字時です。」時計の文字板の羅馬數字を在來の刻限に宛てはめた小册子なども現はれた。そして頭には高帽子(ハツト)や平帽子(ケツプ)をかぶり手には洋傘(オシンブラ)を持ち足には靴をはいて紳士は馬車に乗つた。この時文明開化は家庭にあつては洋燈の花を夜の闇の中に咲かせた。

B

然り、洋燈は夜の華である。

釣るし洋燈は天井からたれ下つて開花し、台洋燈は机上卓上又は室内至る所に開花し、柱にとりつけられて枝の先に花開いた如くあるのは背面に反射鏡を持つ洋燈である。

洋燈が輝けば夜の闇黒は後退する。行燈や燭台の周圍にもやもやとにじんで居たうす暗がりは、洋燈に依つて完全に隣の室まで追ひやら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

北
西
東
南

れた。

C

家庭といふものはボンボン時計が間の延びた音で時を告げ長火鉢にかかつて居る鐵瓶にはいつもちんちんとお湯がわいて居て、おばあさんが煙管で煙草を吸つて居る――と私は思ふのであるがこれは晝間の繪であつて、夜は天井から釣るし洋燈が下つて居なければならない。

明るい洋燈の光の裡に母ちやんは針仕事をし、おばあさんはおばあさんの匂ひのするおばあさんの湯のみにお茶をつぎ、ねえやは雜巾に模樣を縫ひ、私は小机の上に半紙をひろげて墨をすり毛筆で義經の八艘飛びの繪をかいて居る――これは夜の家庭の一情景であつて、私が私を客觀視して神田の佐野屋で買つた露西亞更紗の着物を着せて義經を憧憬せしめ得られるのはこれは遠い昔の話であるからである。

D

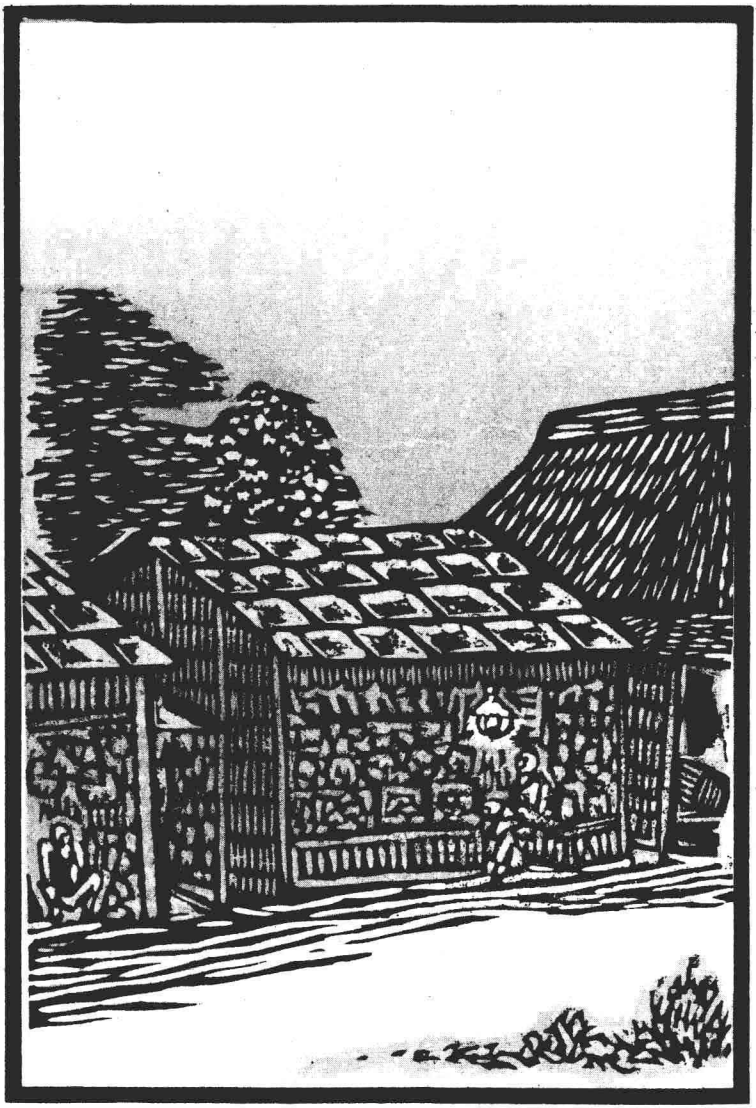
今でも電燈の無いところは洋燈を使はねばなるまい、と此所で私は急に洋燈の光を電燈より明るくなく又時代遲れの如く感ずるのである。行燈を用ふといふやうに時代めかしく洋燈を使ふといふのである。文

川端學藝叢書

明開化の花であつた洋燈の光はもはや現實でなくて物語となつてしまつたのか。

今まで電燈のなかつた三依村にも電燈がつくことになつた、と新聞で知つたのは去年のことであつたらう。その三依村へ三四年前の五月の半過ぎに山女を釣りに行く友人達と一緒に行つたことがあつた。福島縣に近い山間の三依村は思つたよりも明るい所でまだ櫻の花が咲き水の冷たいところであつた。一軒しかない宿屋では土間に馬が藁を食み私共より他に客はなくその夜の食膳には友達の釣つた山女がつき山獨活がついて、台洋燈が赤茶けて室の中を暗らくして居たことだつた。

私の近所にも洋燈を用ひて居る家が二軒ある。一軒は街道に面した小さな菓子屋で、安ビスケットや煎餅を並らべて居る店先には釣るし洋燈が下つて居て、隣の自轉車屋と小さな穀屋の間に夜は尚うす暗い店先である。もう一軒は停車場の直ぐ裏手に當る百姓家である。去年の九月の始めその家の息子が應召して入營するので朝四時頃私はあいさつに行つた。内緒で停車場の構内を横切り線路を越えて露深い草の中を袴のももだちをとつてその家に行つた。うす暗い庭先には大勢集



まつて立つたりしやがんだりして居るし縁側にも腰をかけて居る。家の中には釣るし洋燈が明るくなつて行く曉のうす闇の中に一ところ赤茶けた明るさをこびれつかして居た。

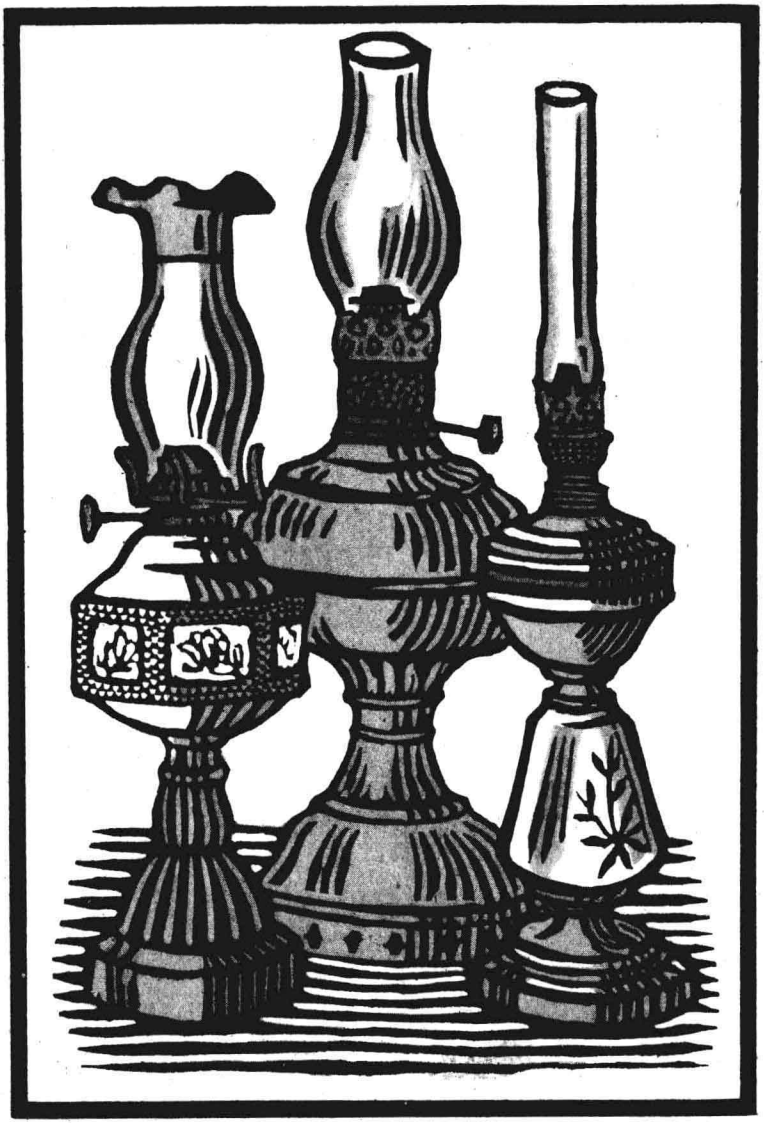
E

私も實は洋燈を持つて居る。一つは何年も前に隣市で買つた台洋燈である。一つは黒船館主人に頂いた台洋燈である。もう一つは同僚の村山氏の家の藏の中にあつたといふ舶來の台洋燈である。これは惜しいことに笠がない。私の買つたものは笠のない形式のものである。黒船館所藏であつたものは笠がないがこれも笠のあつたものではないかと思ふ。私は洋燈を時々使ふのである。冬の間は、洋燈に火をつけて夕飯をたべて居る間に、電燈がつくのが殆ど毎日である。又停電の折にも使ふのである。

F

私の居住する村の隣市には前述のやうに私が洋燈を買つた店が今でもある。その店は硝子屋であつて、硝子製の器物の間に天井からは常に何箇かの釣るし洋燈が釣るしてあるし又棚の上には台洋燈が置いて

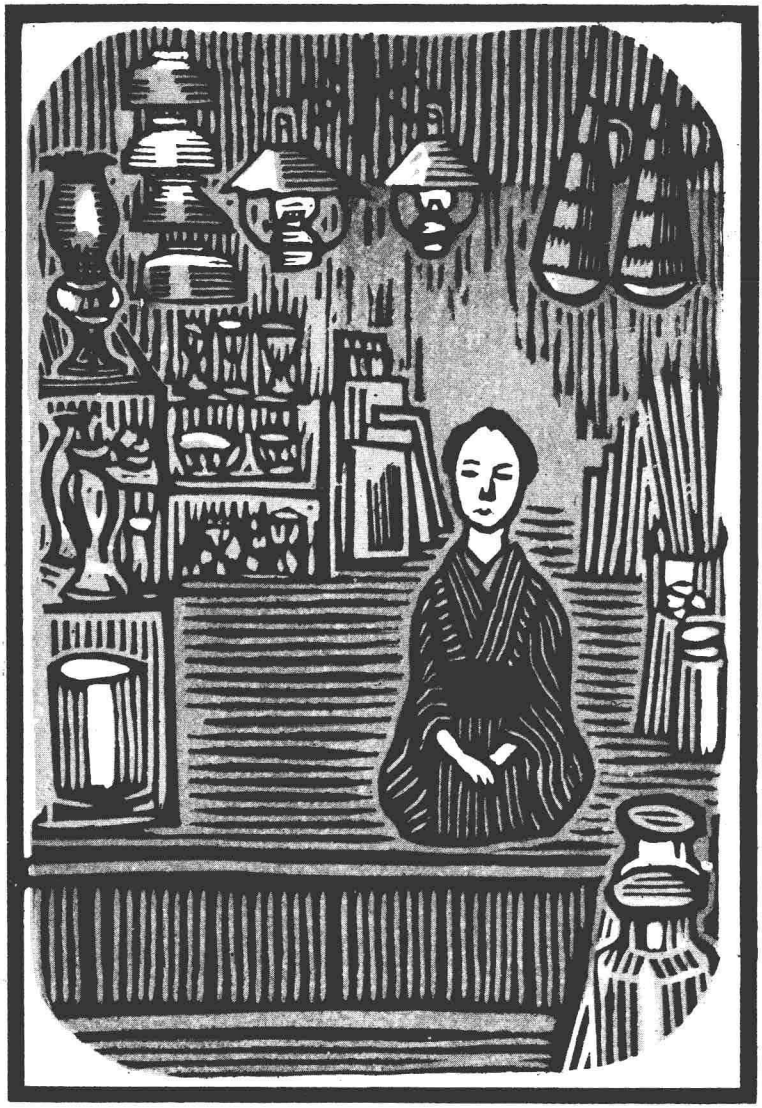
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.



ある。又ペンキ塗り圓錐形の上から下げる形式で石油を上に入れて心がその下になつて居て丁度筒型の懐中電燈を逆さにしたやうな洋燈もある。私が以前買つた洋燈の火筒をこはして代はりのものを買ひに行つた次でに、もう少し上等の、昔の賣れ残りか何かの洋燈は無いかときいたら、顔に白癜風のある小母さんは、どなたもさうおつしやるが良いものはありません、と答へた。どなたもさうおつしやるとなると、洋燈の好きな又欲しい人間も居るのだなと思つたことだつた。

G

何年か前のこと、東京のある百貨店で洋燈と何か器物の展覽會があつたので、暇を作らへて見に行つたことだつた。行つてみると實に立派なものが澤山あつて、それこそ垂涎おく能はざるものがあつた。豪華な釣るし洋燈は金屬と硝子との工藝品であつた。台の部分の色硝子又油壺のところの色繪模様又乳白色のいろいろの形の笠や花笠など、とりどりに大きいもの小さいものといはず樂しく見て廻つたことだつた。私などの懐ては如何とも爲し難いものが多く、洋燈も早や骨董の仲間入りをしたかと思つた程であつた。

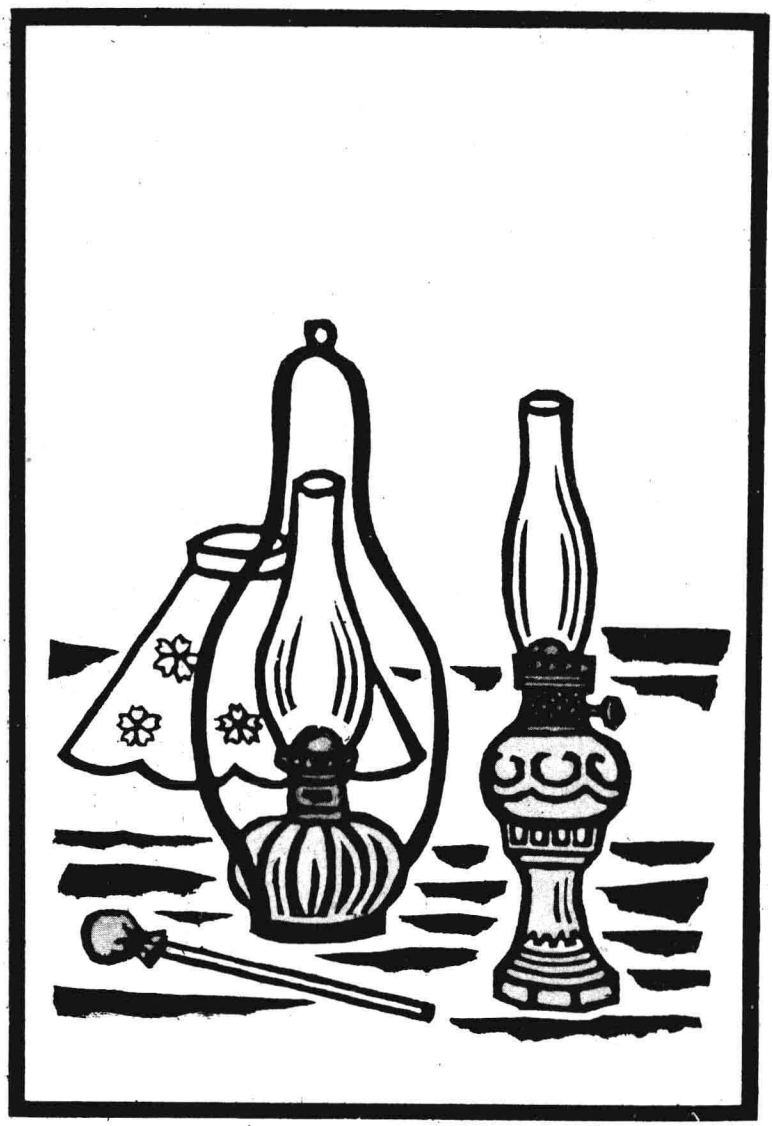


H

中學を終つてもまだ洋燈を使つて居た私は洋燈に關する記憶もさ程薄らぎはしない。火筒に息を吐きかけて布で擦つたいやうなきゆつきゆつといふ音をたてて磨いたり、太鼓のばちのやうな棒の先に布を卷きつけて火筒の中を掃除したり、心を鋏で切つて火をつけてその心を出したり引込めたりして心の工合を見たりした記憶は、ほの暖い火筒の中の洋燈の火を頰に感ずる程である。それだのに家庭では追々と燭光の多い電燈を使ふやうになつて、洋燈の明るさを忘れてしまつたのは殘念なことである。然し今所持する洋燈に火をつけてみると如何にも明るくないのである。胸中にある洋燈は文明開化の光を花のやうにともすのであるが、現實の洋燈はさう明るいものではない。

I

私は又この頃隣市の別の硝子屋で洋燈を買つたのである。前にも知人と一緒にその店へ寄つて、洋燈は無いかと尋ねたところ、若いお上さんは、無いと答へたのであつた。ところがその知人がその店で洋燈を見つけたといふのである。若いお上さんはどういふ積りか有るもの



を無いと返事したのであつたが、その後店の者が棚の一隅に洋燈のあることを私の知人に告げたといふことであつた。類は友を呼ぶで彼も洋燈には關心を持つて居る。それで私はその知人加藤君と一緒にその店へ行つた。加藤君は自分で棚の下から埃まみれになつた台洋燈を三つも持ち出して來た。お上さんは、もの好きな人達だと言はぬばかりのうす笑ひを頬に浮かべて居た。持出した洋燈を見ると、乳白色の硝子で籠の目のやうに横腹に透かしを入れた油壺の下にもう一つふくらみのある台のものと、油壺のところに花模様を彩色してある台のものと、ニッケル製の風景模様を浮出しにした台のものとあつた。私は乳白色の硝子の台洋燈が欲しくなつたので値段をきくと、お婆さんでないと解らないと言つて店の奥からお婆さんを呼んで來た。さうするとその台洋燈は眞直の火筒をつけ丸い上半分は乳白色になつて居る笠をつけ新らしい丸心を入れて三圓だといふことだつた。私のところには生憎笠のある洋燈が無いのでそれを買ふことにした。そのお婆さんの獨り言では、丸い笠だけでも一圓何十錢かするといふことであつた。若いお上さんはまだ不思議さうな顔をして、洋燈を買つてどうなさる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.